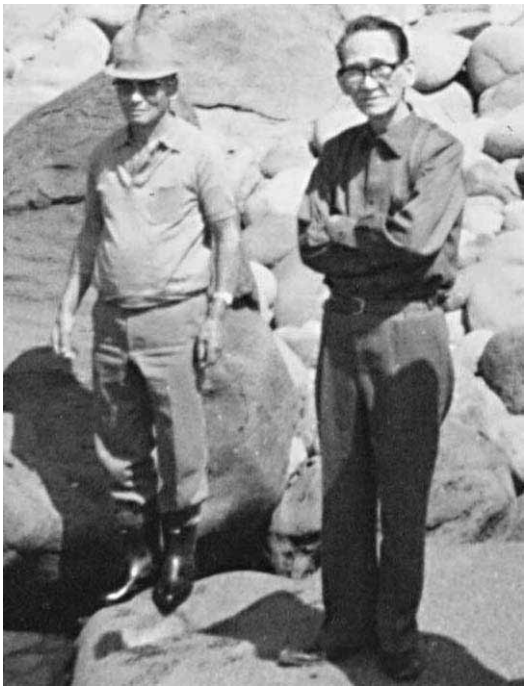
親友 小泉さんを偲んで　　日置 順正

　小泉さんがとうとう亡くなった。兄貴に別れたような気がする。
長寿社会とは言いながら、九十四才まで生きられたら長生きの方だろう。
昇さんは生前私の何かの時いつもマイクを持って貰ったが「この度六十年の喧嘩相手の日置さんが・・・」が切り出しの口状だった。
　実は彼との交際はまだ古く、昇さんが二十才の頃、五反風呂敷に包んだ小間物品の大きな荷を背負い、右手には大島のツバキ油の計り売りの罐を下げ、町内の農村を売り歩いたことがある。私はその頃朱円郵便局の集配人をしていて、今の日の出や峰浜の開パ（当時はどちらも十五～六戸の農家があった）を配達する時、偶々一緒になることがあった。二人共今の人間の青年時代だから意気投合して若いのに天下国家を論じ合ったものだった。又、弁論大会や、陸上競技も好敵手だった。だから彼はいつも六十年と言っているが、本当は七十五年の長い交際だ。二人共お陰で九十三～四才まで長生きしたればこその幸である。大東亜戦中の一時期途切れたことがあったが、私が議会に出てから又復活し往年の仲になった。
　この度最後のお別れだから弔辞を上げたかったが、私も脚腰が弱くなって残念ながら諦めたが、若し実現していたら九十四才の爺さんに、九十三才の爺さんと云う組み合わせになって世の中広いと謂え、珍しいことになったろう。
　小泉さんは戦後古衣商として独立した。物さえ手に入れば儲かる時代、彼の商才は存分に発揮されて間もなく呉服店に転じ、日の出の勢で発展し、そのうち中標津を始め、数カ所に支店を構へるようになった。政治の表舞台には出られなかったが、経済界の雄でもあり町内きっての情報収集所のようでもあった。
　彼と力を合わせて取り組むようになったのは、矢張り津軽藩士殉難慰霊碑の建立からだ。建立以来、私が会長、彼が副会長、弘前市と友好盟約を結び、記念にねぷた祭の暖簾分けを受けて彼が会長、私も副、昭和五十三年に知床博物館が建設せられたが、彼は協力会の会長、私は協議会の副、共に博物館を集り場所にしていた。沖縄県竹富町と、弘前市との交流を進める会が出来て私と彼が正、副の役を背負い随分と二人で一緒に両方へお邪魔した。
　彼は九十才になっても耳や目が達者で、博物館で金さんと三人で机を囲んで長話になると、終いには「お前等つんぼ二人を相手に話すと疲れる」と、冗口を飛ばすが、私は又言ったなとムッとするがそれの聞えない金さんは涼しい顔、ツーンとしているそんな仲だ。
　だが耳や目がよくても昇さんは歯がない。歯ぐきの台が殆ど無くて入れ歯が出来ないとのこと。だから普段軟くて消化のよい食事だ。少し堅ければ美味なものでも摂らない。その上小食で一日の量は私の半分位だろう。好きな酒を止めてからは宴会では私が監視役で隣の席、酌が廻って来ても私が先に「この二人は下戸ですから」と断る。その代わり彼のお膳の少し堅いものは全部私に、刺身位が彼にと交換で私はいつも万腹だった。
　慰霊碑や博物館のことで一緒にやった連中で現在どうにかやっているのは金さんと二人きりになった。
　それから最初に書いた彼の六十年の喧嘩相手のことだが、それは彼が言っているだけのことで私は別に思っていない。只彼にしてみれば私がそうゆう存在だったのだろう。正直言って小泉さんの全盛時代、彼の発言や行動に対し、たとへ意見を異にしても逆らう人は、意識して先ず無かったろうと思う。けれど私は事によっては決して妥協しなかった。だから俺に逆う奴は日置だけなんだとの表現と思っているが男冥利に尽きるとの訳だ。
　顧みれば七十五年の長い間兄弟のように歩んできた二人だが平成十年の斜里町百二十年、町制六十年の節目の大式典には二人揃って特別功労賞を載く栄誉に浴し、身に余る光栄だった。今その小泉さんに一足先に先立され、言葉がない。
　今ここに思い出を書いてお別れする。



津軽藩士殉難慰霊碑のさお石を探す小泉さん(右)と日置さん　　（昭和47年　チプドマリ海岸で）

～事務局より～
　今月号は、日置順正さんに協力会前会長の小泉昇さんとの思い出を書いていただきました。博物館開館当時から、博物館や協力会の活動に尽力を注いでくださった小泉さんの略歴もあわせてご紹介します。

発行　斜里町立知床博物館協力会　2003.11.25
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49　斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/